

日本の女性の結婚観

日本は結婚率が高い国だと言われている。確かに、「結婚して半人前、子どもを持って一人前」とも言われ、結婚して子どもを持つことは、人の一生の中でも大変重要で、また、当然のことだと認識されてきた。さらに、結婚することにより、法的にも経済的にも有利になるという側面もある。

ところが、1980年代の後半から、マスコミでは、しばしば男性の結婚難に関する問題が取り上げられるようになった。この問題の一番の原因は、20代から30代半ばの女性が、同世代の男性より少ないことである。しかし、それと並んで重要だと思われるのは、若い女性が結婚をしたがらなくなったことである。この現象は「非婚」という流行語まで生んだ。「非婚」とは、無理に結婚せずに独身を選ぶことを意味していて、「未婚」とは違う。

女性がこう考えるようになった背景には、女性の社会進出がある。従来の日本型の結婚は、男性が「嫁をもらう」ということであった。そして女性は、嫁ぎ先で家事や育児に専念し、夫に「養ってもらう」のが普通だった。そのため、「男は仕事、女は家事」という考えが今でも残っており、女性はたとえ外で働いていても、家事も全部やらなければならないと考える人が少なくない。女性が「結婚」と「仕事」や「自分の自由にできる時間」を両立させようとすると、大きな負担を強いられることになる。それで、最近の職業を持つ女性たちは、このような結婚に疑問を持つようになった。自分が興味を持っている仕事や、せっかく手に入れた経済的にも時間的にも余裕のある自由な生活を、そのような負担のある結婚生活のために簡単にあきらめることはできない、と考えるようになったのである。

こういう女性の新しい結婚観は、かなり定着してきたように思われる。実際には、一生結婚するつもりはないと言う女性は、まだ少ない。しかし、自分が納得できる結婚生活を送れる相手が見つからない限り結婚しない、と言う女性が増えていることは確かである。今後、社会が変化するにつれて、結婚の意味や男女の役割分担などについて、女性だけでなく、男性もより積極的に考えていかなければならないことは言うまでもない。